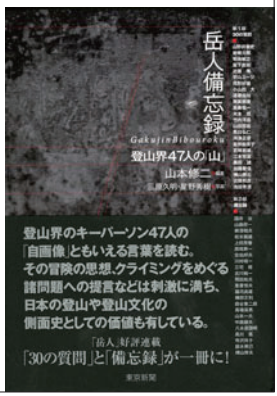
岳人備忘録

登山界47人の「山」

山本修二◎編著

第1部　30の質問　写真◎三原久明

第2部　備忘録―語り残しておきたいことども　写真◎星野秀樹



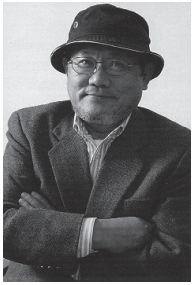
2010年10月28日　初版発行
発行所　東京新聞出版部

第2部
備忘録――語り残しておきたいことども
写真◎星野秀樹

備忘録・No.1

国井 治

Kunii Osamu



ほかのクライマーたちが「なんだ、同志会のあの、ふんどしみたいなのは」ってなわけ。あっという間にクライマーたちに広がって、一時は三ツ峠にクライマーが一〇人いたら七人までがトロールのシットハーネス。いくら仕入れても足りない時代がありました。

山本さん、わたしに何をしゃべらせようっていうの。なんだか照れくさいんだけど。（遺言みたいなものです）。遺言？　冗談じゃないよ、そんなの。まあ長く山の道具やってきたから、そっちのことならいくつか面白い話もできると思うけど。

＊

道具屋の人たちはそれぞれいろんなストーリーを持ってますけど、わたしの場合、やはりそれまで日本になかったいいものを紹介するってのは仕事としてやりがいがありましたよね。

たとえばトロールのウィランス・シットハーネス。当時の第二次ＲＣＣなんかのクライマーたちはホープ社なんかのチェストハーネス、ブラジャーなんて言われてたけど、それで登っていたんだけど、一九七〇年のクリス・ボニントンのアンナプルナ南壁隊が荷上げ用に考案して使っていた腰につけるハーネスが七三年ころからイギリスで発売され、その翌年に輸入したんです。日本に入ってきたヒップハーネス式の第一号ですよ。

ちょうどそのころ山学同志会がジャヌー北壁の準備をしていて、小西（政継）さんに装備の協力を依頼されましてね。シェルパの分も含めて三〇個ほど寄付しました。それで、同志会の連中が日本に帰ってきてから週末に三ツ峠へ繰り出すと、ほかのクライマーたちが「なんだ、同志会のあの、ふんどしみたいなのは」ってなわけ。あっという間にクライマーたちに広がって、一時は三ツ峠にクライマーが一〇人いたら七人までがトロールのシットハーネス。いくら仕入れても足りない時代がありました。シットハーネスはその後、落ちたら逆さになって危険だとかいわれましたけど、わたしの調査ではそんなこと一回もなかったし、本来は荷上げ用のユマーリングのためのものですから。アイゼンやスキーをつけたまま装着できるあの機能は永遠のもんだと思うけどね。

ＥＢシューズもそう。当時イギリスの「マウンテン」という雑誌でバンバン広告が出ていて、かなりのイギリスの現役クライマーが履いていたんですよ。（ロン・フォーセットとか）。そうそう。底がない布の靴で、くるぶしのところにＥＢという文字が入っていた。わたしは当時、ある商社の子会社にいたんですけど、この靴のことをロンドン支店へ行って調べたら、フランス製だよと。それですぐパリへ移動したら、パリ郊外にある

エドモンド・ブードノーという靴屋だとわかりましてね。（へえー、それでＥＢ。それは初めて知った。ぼくはイギリス製だとばっかり思ってました）。一〇人くらいの職人さんが作っている小さな工場でした。いまはヨーロッパ中の注文で処理しきれないから日本にまでは無理だと言われたけれど、少しでいいから回してくれとお願いしたんです。

で、入荷して新大久保のＩＣＩ石井スポーツに持っていったら、そこの靴職人、森田（弘史）さんが「国井さん、これ、本底（ビブラム底）ついてねーじゃねーか」って。「こういう靴なんだよ（わかってねーな）」と。でも店員に外国の本とか見て研究熱心なのがいて、いまはモンベルの渋谷店店長の半田久さんですが、「これだよ、ボニントンが履いてるのって」。その後、森田さんにはたくさん売ってもらって感謝してますよ。岡山の近藤邦彦君や長谷川恒男君にもガイドを始めたころに使ってもらったけど、とってもいいよって言ってくれましたね。あの靴にいい登攀の思い出を持っている年配のクライマーは多いと思いますよ。

それとノースケープの肌着。山の肌着はとにかくウールという時代が長かったけれど、一九七〇年代になってからクロロファイバーという石油系の素材が開発されて、その肌着を一九七三年のエベレストに持っていったら、一カ月くらい着っぱなしでもとてもよかった。その二年後にイギリスに行ったとき、北海油田の冷たい荒波をドバーンとかぶるヤグラの上で働く作業員たちが全員、防寒用に着ている肌着があるという話を聞いて、ピーンときましてね。それがノースケープだったんです。

日本に持ってきたのはその肌着より、毛がもこもこしたパイルジャケットのほうが先でした。山田昇君が参加したダウラギリの群馬隊の連中とかいろんな人に使ってもらったら山ヤが気に入っちゃって、それがいまのフリースのハシリですよね。肌着もロングセラーでした。

以上の三つはいずれもヨーロッパのものですけど、そのうちあっちのものに飽き足らなくなってきて、アメリカ大陸の登山用具ってどうなってるんだろうという興味が生まれてきた。七八年だったかロスに行ったとき、「ケルティ・ショップ」というバックパックの店をやっている、のちに恩人になるディック・ケルティという人

と知り合って、彼がアメリカのアウトドア文化のようなものを知るきっかけをつくってくれました。彼にしろ当時のシエラデザインズの創設者にしろ第二次大戦を経験してきて、その癒しを求めるようにバックパックを背にシエラネバダなどへトレッキングに入っていったわけ。その後のベトナム戦争から帰ってきた若者たちの多くもそう。

そういうアメリカで生まれたバックパッキングというかアウトドアスポーツの流れを汲むもので忘れられない商品が、シエラデザインズのマウンテンパーカー。例の有名な「60／40」シリーズ。レビュファに憧れたようなアルプス系の日本のアルピニストとはちょっと相容れないアウトドア文化かなと思ったけど、わたしは比較的ファジーというか、受け入れることができました。街で着てもいいんじゃないかと。げんにニューヨークあたりの若い医者や弁護士など、いわゆるヤッピーと呼ばれた人たちがダークスーツの上にマウンテンパーカーを着ていて、「これだ」と思って、いまでは信じられないけれど「メンズクラブ」に広告を出したんです。そしたら実際、街でよく売れましたね。岳人、ヤマケイではない世界、まさにアメリカの大陸文化相手の仕事もさせてもらった。カナダではソレルの長靴も見つけました。

こうして振り返ってみると、わたしは、ヨーロッパのアルピニズムから派生した登山道具の世界と、アメリカのアウトドアスポーツ用として括れる商品の両方を経験したことになりますね。シエラデザインズやノースフェイス発祥の地、バークレーの街を歩いて人の服装を見たり、彼らの文化とまではいわないまでも、いわゆるアルピニストとは違う匂いというようなものを体感していましたから。

*

一九八四年にマジックマウンテンを創ったのは、八三年にナンガパルバット日本人初登頂の野心を実行することと関係がありました。エベレスト、ヌプツェに続いて一〇年間に三回目の遠征ですから会社は辞めなきゃいけなかったけど、景気が悪かったし、独立心もありましたからね。（会社は困ったんじゃないですか？）。まあ、ぼくしか知らない仕事もありましたからねえ。ただ、そういうつっぱった奴がひとり辞めたからといって、企

業が行き詰まるという話はあんまり聞かない。そう思ってんのは本人だけでね。

一九七五年にマウンテンイクイップメントの工場に行ったことがあって、そのMEのスコットランドにある販売店の名前が「マジックマウンテン」。そのときにはよくわからなかったんだけど、わたしが独立するときにその名前をもらいに行ったら、なんでも頂上がない不思議な山があって、いつまで登っても頂上に到達しない。それでも永遠に登りつづけるというスコットランドのおとぎ話に由来する名前だった。つまり永遠に努力するというような意味があるんですよ。そんな話を同志会の小西さんにしたことがあって、小西さんが独立して創った「クリエイター９０００」もその話にヒントを得て命名したようですね。九〇〇〇メートル峰登頂なんて現実にはありえないことだけど、そういう夢を見続けるという……。

独立話でよく聞くのは、前にいた会社で手がけていたブランドの代理販売権をこっそりいただくという話。わたしは一切そういうことはしなかった。ほかがやっていることを奪うなんていやだから、独立してから筋を通して交渉し代理店になる。いま当社の冬の主力商品であるグリベルもそう。それに、やはり自分の、マジックマウンテンのブランドを作りたかった。いまでもその思いは強い。なかなか売れるようになるまでは大変なんですけれども。

その最初の商品がアルパインライトというテント。ひとりでも一分ぐらいで張れるようにポールの筒の反対側を閉じた。それまでのテント設営では向こう側でだれかが押さえていなければならなかったけど、これなら吹雪いているときでもひとりで素早くテントが立てられ、さっと飛び込める。そして中には、ツェルトと違って、丈夫な骨に支えられた安定空間がある。大場満郎君が北極に行くときに会社に相談に来て持っていきましてね。北極ではポールも折れることもなくて大丈夫だったと聞いてうれしかったですね。ただ、商売として考えると、最近はテント不況。みんな山小屋ばかりですから。ましてや、冬の稜線でテント張るような人は少数派になっちゃったからねえ。

この筒の袋閉じはわたしのアイデアで、特許を取ろうと思えば取れたけど、あえてしませんでした。ドイツ

のファウデ社の社長が来日したときに、この新案を使わせてほしいといわれてオーケーしました。このアイデアを取り入れたテントがどこのブランドであれ、それでいい登山をしている人たちがいるわけだから、それもこの仕事をやっている喜びのひとつだと思いますよ。

新たな用具の開発の余地となると、最近は売ることばかり考えているからなかなかねえ。ある意味、くるところまできちゃってる。どこかがヒット商品を出すとすぐ二番煎じで、五番煎じくらいまでいくでしょ。それにいまは大前提になる登山者が減少していて、とくに主体になっている中高年がほとんど冬は眠ってしまっている。道具の良し悪しというのがほんとうにわかるのは冬山の世界ですよ。凍っちゃいけない、濡れちゃあいけない、軽くなきゃいけない。そういうのが冬山でいちばん要求されるんだけど、肝心の冬山登山者が減っちゃってるから、いい知恵もなかなか届いてこない。

ぼくが言ったことばでアルパイン感性というのがあるんですよ。冒険的登山というのかな、それにのめり込んだ人たちの価値観というか、かっこよさってあるんです。人生観、スタイル、文字どおり服装も含めたスタイルや、考え方などすべてを含めたアルピニスト独特の粋な感性が。それはなかなか文章や言葉に具体的に表現できないんだけれど、多くのクライマーたちは持っていたはずですよね。ぼくはそれをすごく大事にしてきたつもりでいるし、これからの若い人たちにも引き継いでいってもらいたいなあ。用具に関してもね、そういう感性を具現したものが売れてほしいんだけれども、ちゃんとしたテントが売れなくなっちゃって大きなキャンプ用テントは売れている。やっぱりシンプルで……言いたいことわかってくれると思うけど。いま来日中のプレゼリさんの登攀スタイルはまさにそうなんではないでしょうか。

＊

板橋区に城北学園という中高一貫の男子校があって、ＯＢに山岳部卒ではないけれどグループ・ド・ボエームの佐内順さんや武藤昭さんがいます。まあ一五歳でそこの山岳部に入って、根が素直ですから山にはまりこんじゃいましてね。明大山岳部で植村直己さんと同期でゴジュンバ・カンの隊員だった小林正尚さんは、山の

夢を教えてくれた忘れ難い城北山岳部の先輩なんです。通学カバンの中は「岳人」のバックナンバー。机の上に教科書立てて、膝の上で「岳人」読んでましたよ。

そもそもこの仕事に入ったのも「岳人」が縁。高校卒業したあと証券会社で電子計算室にいたんですが、一九六七年の三月に穂高の屏風で遭難事故を起こしちゃって、凍傷で五〇日間、豊科の赤十字病院に入院してたら、見舞いに来る友人が「岳人」を持ってくるわけ。その「岳人」にドロミテ登山靴の広告が載っていて、こういう仕事もいいなと思って、そっちに転職したのがこの業界に入ったきっかけですから。

高校のころ松濤明さんの『風雪のビバーク』を古本屋で買ったのが運のつきで、登歩渓流会はもうないと思っていたら「まだあるよ」っていうので、卒業してすぐに入会しました。わたしは岩登りと冬山をしたかったんで、正直ちょっと拍子抜けしましたね。クライミングクラブじゃないからオールラウンドの普通の縦走のような登山をやる人が多かった。ただ、先鋭的なことを標榜している人たちが数人いたんで、そういう人たちについていきました。

当時はへそ曲がりな連中が多くてね。穂高だ剱だってまぶしいところには行かない。お金も休暇もない勤労者が多かったので、せいぜい土曜の夜行でいける範囲でしょ。登山靴は夏は履かずに冬山用にとっておいて。だから夏は地下足袋で行ける山へ。そういう条件のなかでも切磋琢磨するから強い人はたくさんいましたよ。夜行日帰りで北岳バットレスの集中登山をやったり、三月に幽ノ沢中央壁を登ったのも両夜行日帰りでしたね。

吉尾弘さんが冬の滝沢登ったのが一九五七年でしょ。それから冬期の滝沢スラブが登られるようになるあたりまでの一〇年間はどこを登っても名誉ある冬期初登攀という夢のような時代でしたよ。だから山岳会間の競争というか功名心みたいなものもけっこうあってね、土曜日夜の上野駅で（長岡行きの普通列車）、そう、長岡行きでね、あいつら見かけたぞ、まさか六ルンゼ左俣では？　格好はどうだった？とか、天気いいからひょっとしたらやられちゃうよとか、どこどこの会のだれがどうしたこうしたとか、すげー奴が入ったとかね。当時は「岳人」の記録速報覧を見て一喜一憂していた時代でしたよ。

ただ渓流会は、ちょっとずれていまして、ぜんぜん違う山に目が行っていた。（越後駒の水無川流域ですか）。ええ、一九六三年にすぐ上の兄貴分の会員が北沢本流を登って、ここは地域研究の価値がまだ残っている、いいルートがたくさんあるんだと。ちょっとした枝沢を登っただけでスラブ状になっていたりして、それから気に入っちゃって。それこそ夕方、水浴びをしてフルチンで歩いていてもだれも来ないし。一〇年くらい通って地域研究としてまとめたものを出したんです。「年報１９７５」にわたしの論文が載っているんで読んでくださいよ。

記録に残すことが最近はおろそかになっているけど、あとの人の役に立てばと思って当たり前のように渓流会ではやっていました。いまはそういう対象が身近になくなっちゃった。どこを登っても、べつにどうってことないって言われてしまう。わたしたちのころはちょっとしたところを登ってきたら、みんな集会のときに真剣に聞き入ってくれる、それくらい報告する喜びがありました。いまは、どこ登った、ああそうですかで終わっちゃう。さびしいですね。

ハードなことをやめたのは、けがをしてね。ナンガ・パルバットの雪崩で腹を半分裂いちゃって。はらわたは出なかったけれど、すごい傷が残ってますよ。

こんな話でいいんですか？

＊

なんだかまとまりがつかない話になってきたなあ。傷といえば、ナンガの雪崩で志村一夫を失ってぼくは心にも傷を負いました。病弱だった彼の母上が、息子が帰らぬ人となったことを知って亡くなっちゃった。長いあいだ落ち込んでいたところ、一通の結婚式の招待状が届いたんです。志村の姪、姉上の娘さんの祝事でした。これはうれしかったなあ。でも、遺族に理解されないでそのままになってしまっている遭難もあります。だから、こういう取材をされると、俺なんか出ていいのかなあと……。

六〇年代から八〇年代にかけては登山者やアルパインクライマーが多かったけれど、遭難事故も多かった。「よ

り困難な」という価値観しかなかったから、冬にあそこに登って「すごい」って言われたくてね。山岳会に入ったら何よりまず、喪服を揃えろといわれたほどだったですよ。

＊

こうやって長く山の世界にかかわっていると、それこそいろんな出会いがあって、忘れられない人たちはたくさんいます。ここで語り残しておきたい人といえば、まず加藤武彦さん。清水ＲＣＣの創設者で、北岳バットレスＤガリー奥壁や前穂Ⅳ峰東南壁などにルートを開いた、知る人ぞ知る男です。

出会いは一九六七年正月の穂高。滝谷を出合から登って行ったら荒れてきて、北穂に着くと、頂上に清水ＲＣＣの連中が陣取っていたんです。吹雪で閉じ込められた六日間、北穂小屋の暗い屋根裏で加藤さんと語り合いましてね。アルプスに行きたいけど金がないから、ナホトカまで船で行って向こうで皿洗いでもやろうとか。ひたむきでしたね。彼がアイガーから帰ってきた翌年だったかな、正月の剱合宿中に、早月尾根でスリップした新人を自分も飛び込んでいったんは捕まえたんだけど、そのまま一緒に落っこってふたりとも……。リーダーとしてのそういう自己犠牲の精神もそうですし、とってもやさしくて強い、野武士的な男でした。彼が生きていたら、同志会の小西さんとは違ったタイプのリーダーとして、その後の日本のヒマラヤ登山も違っていたんじゃないかなと思ったこともありましたね。

道具に関係がある人では、金井五郎さんとディック・ケルティさん。金井さんは札幌の秀岳荘の創業者。新潟から大正時代に北海道へ渡った苦労人で、北大山岳部のテントやザックを縫った人です。ぼくが二〇代のころ札幌に赴任していたときにずいぶんとお世話になりました。まだ「内地の人」なんていわれた時代です。彼の息子さんたちやその山仲間とは山にもよく一緒に行って山スキーを教えてもらったり。それでぼくは赤岩で人工登攀なんかを彼らに教えてあげました。アブミ使ってハングを越えたりするのが彼ら初めてなんですよ、道具屋さんなのに。「それじゃ困るじゃねーか」って。それに五郎さんとはよく用具談議もしましてね。「つきつめていくと国井さん、登山なんてものはいいリュックといい山靴があれば、あとは工夫しだいですよ」と。

ぼくは商品企画に行き詰まると、金井さんのこれ、思い出すんですよ。要は、基本はいつもシンプルなんだと。

札幌の登山界はけっこう文化的なところがあるんですよ。秀岳荘では「山の素描」という、「アルプ」みたいな雰囲気がある同人誌を出していて（常連筆者に伊藤秀五郎さんとか坂本直行さんとか）、うん、山は、ただ登った下りたというだけではなく、文化的な側面も深みがあって楽しいんだよと。金井さんからの影響はそういうのもあったなあ。

のんきな時代でね。登山ショップなのに日曜日が休みで、朝飯ごちそうになってから息子さんたちと山へ行くんです。夏は支笏湖周辺の沢登りをして、昼には抜けてそのままこんどは石狩の海岸で海水浴したり。だから東京に帰ってこいと言われたときは悩みましたよ。会社辞めて札幌に転職しちゃおうかなって。人情が豊かだったし。結局、札幌から東京に戻ったのは、俺も手を上げればヒマラヤに行けるかなという時代が来ていて、そのためにも東京にいないとチャンスがめぐってこないんじゃないかと。札幌にいたらそんな話は当時はなかったですから。

ディック・ケルティさんはぼくの父親くらいの世代ですけど、大戦前からのバックパッカーで、山の道具で生計を立てている人として、彼のライフスタイルには大きな影響を受けました。一九五〇年にシエラネバダでバックパッキング中に、背負子の二本脚をジーンズの尻ポケットに突っ込んだ相棒が、「ディック、こうするとうんと楽だぞ」と言うのにヒントを得て、のちにフレームパックにぶ厚い腰ベルトを取り付けたのがケルティパックの始まり。荷重を肩だけでなく腰へも負担させる工夫。いまでは当たり前のように、どのザックにもぶ厚い腰ベルトが付いているけれど、これはディックの偉大な発明なんです。

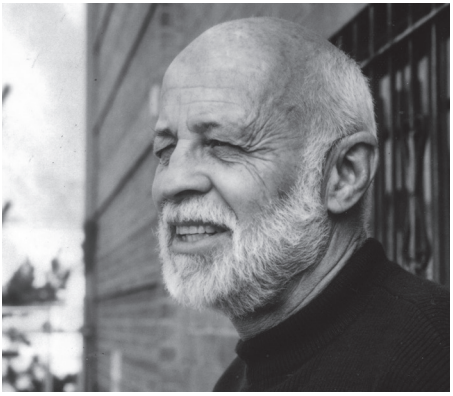
わたしが独立したときにはいろいろ親身になってアドバイスをしてくれました。会社、買収されてしまって、晩年はさみしそうだったけど、ケルティというブランドはいまも残っています。同業の大先輩ですね。金井さんもそうですけど、いい用具を作り、そういう人生を大事にして生涯を閉じたということでしょうか。

いつだったかな。アッパーヨセミテでの四日間のバックパッキングを終えてロスでディックと待ち合わせた

ときのこと、一緒にR・E・Iへ買い物に行くと、店員たちが「おい見ろよ！　ディック・ケルティが来てるぞ」って。アメリカでは山の先輩としても若い人たちに知られていたようです。彼が八四歳で亡くなったときは、ロサンゼルス・タイムスに大きな記事が出たんですよ。一昨年、ネナ夫人を訪ねたときに「国井さん、これ見て」というので見ると、アーノルド・シュワルツェネッガー知事からの弔電でした。

1967年1月6日、旧横尾山荘前で加藤武彦さん（右）と。北穂冬期小屋でグレポン古川ルートのチャンスを待つも風雪止まず。沈殿中、多くのクライマーと山の夢やシモネタを披露し合った。

金井五郎・光子夫妻
1984年3月、札幌市北区の自宅にて（写真提供・金井哲夫）



ディック・ケルティ
1976年夏、ロサンジェルスにて（写真提供・武藤昭）

*

一九七三年のエベレスト南壁は補欠扱いだったの。まあ実際、現地に行けば欧州帰りのエリート隊員たちより下痢に強いやつのほうが動けたりしてね。そこで個性的なメンバーと知り合えたことが、その後のぼくの人生のすごい糧になりましたね。いろいろありましたから。人間模様を下から観察ができた。森田勝さんや長谷川恒男君は世間では強面で通っていたけれど、森田さん、ぼくのテントに来て泣くんですよ。「クニイちゃんよぉ、おれはもうよぉ、湯浅に見捨てられたよ」って、一、二時間もぼくのテントから出て行かないの。長谷川君も愚痴をこぼしにくる。ぼくと桜井正巳が入っていたテントなんて落ちこぼればかり、いつもゴロゴロ。そんなこんなで不満分子もいたのはたしかだけど、でもまあ、だれが隊長やっても大変だったでしょう。隊員は個性派ばっかり、俺が俺がみたいな連中ばかりだったから。それにみな若かった。湯浅(道男)隊長だって、たしか三四、五歳でしょう。そういう場を与えてくれたんでいまは感謝してますよ。

森田さんのエピソードの続きだけど、途中ですれ違ったとき「たばこ、くれ」って言うので「禁煙中です」と言ったら、「おめえ、そんな神経質なやつに八〇〇〇メートルの壁、登れるか!」。訳がわからなかったなあ。そのあと、森田さん、広島の高見(和成)君と南壁右ルートの八三八〇メートルまで行っているんです。そこで一服したはずです。

ぼく、おもしろい記録を持ってましてね。ぼくなんか、はなから登頂なんて声かからないルートパトロール隊みたいなもんで、ベースとウエスタンクーム氷河を二三回も往復しているの。ルートの保守点検とフィックスロープの補修ですよ。危険だからみな行かないの。ドクターの住吉(仙也)さんが、いままでのエベレスト登山隊員の新記録じゃないかって言ってましたけど。下積みに徹しているうちに、上部にいる隊員たちは頭痛でまいってるのに、こっちは順化完璧でどんどん強くなっちゃってね。

この遠征はいろんな意味でずいぶん勉強になりましたよ。こうやれば安く遠征ができる、こんな装備は必要じゃないやとか、そういうこともわかりました。このエベレストがあったから、登歩渓流会で念願だったヌプツェがやれた。主峰は行けなかったけど、北西稜、いちばんかっこいいところを登攀できましたから。その延長を

ヒマラヤでどんどんやりたかったけど、何回もやるのはなかなか難しいですね。このビジネスを始めちゃったし。

＊

いまはアルパインクライミングというのかな、ぼくは冒険的登山という捉え方をしているんですが、それにのめり込むほどリスクが大きくなるけど、でもぼくとしては、若い人に冒険的登山をどんどんやってほしいですけどね。以前は鉄のカラビナとかジャラジャラさせて粗末な装備でね。あの時代はなんだったんだろうかと同業の坂下（直枝）さんともたまにそういう話をするんだけれど、やっぱり伝え残したいのは、冒険的登山の充実感。山を舞台にした冒険がすたれてほしくないなあ。

だからいまの状況がくやしいんですよ。靴もザックもゴアテックスヤッケもこれだけいい時代になっているのに、逆に登山者が減っちゃって。先だって地方都市の登山ショップの人と話してたら、この町はもうほとんど次郎長一家だって。一に大政、二に小政と、名前を指折り数えられる程度しかクライマーがいない。その人がピッケルを買っちゃうと、もう次が売れないんだもん。情けない時代になったなあと思って。馬目（弘仁）君は衰退しているとは思えないと言うけど、あきらかに衰退してますよ。彼の名前を出して悪いけれど、馬目君レベルが昔はゴロゴロいたんだから。各山岳会に二人や三人。

じゃあ冒険的登山の復活のためにどうすればいいかというと、なかなかむずかしい話ですね。前から何とはなしに気になっていたのは、登山スタイルが進化したことで、アルパインスタイルとか無酸素登頂とか、ソロとか、そういうスタイルでないと格好悪くて時代遅れだと思われる風潮があるということですかね。そういう風潮に気後れしないで、大勢で行こうと酸素を使おうと、旧式の極地法スタイルであろうと、自分たちに合った安全な方法で楽しんでもらいたいなと。無理して登頂しても、いまではもうあらゆるスタイルで登り尽くされているから、それが名誉なことでもなく、讃えられもしないんだから。だったら、あくまでも個人的な冒険なのだから、大いに自己満足すればいいんじゃないかと。昔の山仲間たちが集まってとか、スタイルを気にせずどんどん出かけてほしいですね。それで得るものは期待以上のものがあると思いますよ。

マジックマウンテンがスポンサードしている山野井（泰史）君の話だけど、当時遠征から帰ったらすぐ次のアルバイト先を探さなければならなかったらしいと伝え聞いた。そんなことの繰り返しでは長くは続かないでしょう。矛盾しているんですけど、山、必死にやっていたら働く時間がなくなるから食えなくなる。そうやって挫折しちゃう人が多いんですよ。やはり衣食足りて、いいクライミングができるんじゃないでしょうか。山野井君は素直で、ハングリー精神で山に打ち込んでいた青年だったので好感を持ちまして、用具に金を使わないで済むことで最低生活が多少しのげるのであればと、そういう思いで一九九四年に用具契約をしました。ぼくが登山を中断したのでぼくの登山経費を援助した程度ですが、まあ彼の夢をつなげてあげる手助けをしたということでしょうか。

＊

かつて三〇年も前にアメリカへ行ったとき、「ウィルダネス」という単語に初めて接しましてね。辞書を引くと、人間がまださわったことも、踏み入れたこともない荒野。これだと思いましたよ。そういうところに憧れを抱くのが冒険の世界。そして、それが人類の活力の源なわけだから。一橋大のＯＢの中村保さんが「チベットのアルプス」と名づけた針峰群なんか、写真見ただけでうずうずしますよね。ルートがとれるようなラインを思わず目で追ったりして。ほとんどが六〇〇〇㍍クラスの山で、ベースが約三〇〇〇㍍と考えても標高差三〇〇〇㍍以上あるんですから、あれだけだって何十年も楽しめる。中央アジアの山々はまだまだ一〇〇年以上たっても登り尽くされることがない冒険的登山の宝庫ですよ。そういう素晴らしい舞台がこの地球にはまだまだある。若い人たちにとってはまさに天国。うらやましくてしょうがないですよ。

ぼくも早く行きたくてしょうがない。抱いている夢は激しい登山じゃないんです。山旅とでもいうのかな、荷物は身の回りのものだけで、せいぜい手伝いのポーターを連れて、メモしながら、へたくそな写真でも撮りながらあちこち歩き回ってね。（放浪の憧れは強いですか）。強いですね。一九七三年のエベレストのあと、日本にしばらく帰らなかったんです。現地解散だったので渓流会で行ける山を探しにまた山へ。遠征っておかし

いもんで、登山が終わって町に下りてきたときのほうが体の調子いいの。順化しきって体もスリムになってね。だからじっとしていられないんで、また山に登りたくて。それでシェルパをひとりだけ連れて放浪をしまして、とてもよかったなあ。だれも行ったことがない冬のロールワリンの峠を越えたりして、道中の寒村でもらったオレンジの甘さが忘れられない。いま思い出してもうずうずしますね。

ヒラリーは若いころ、奥さんをつれてダージリンからナムチェまで四〇日もかけて歩いているの。ぼくは女房を亡くしたけど、そういうのをやってみたいですね。

*

その昔、正月の利尻合宿の帰途、夜汽車のなかで七五調の詞を作り上げたことがあるんですよ。山本さん、恥ずかしいけどこの際、書き残してほしいなあ。これ、すでに知られていた「蔵王の山男」の替え詞で、曲は「東京流れ者」で歌うんです。登歩渓流会はトボケルと略称していたんで、「トボケルの山男」として歌われました。こんな詞です。

山に逝きし岳友を
しのんで辿る谷川の
ことしもコブシが白い道
俺らトボケルの山男
ああ切なき我がこころ
（春の谷川岳東面旧道で）
地下足袋わらじにほおかぶり
濡れたスラブも奥壁も
これがわれらのユニフォーム

俺らトボケルの山男
ああ愉しき我がこころ
（越後水無川真沢にて）
赤い葉ゆれるナナカマド
狭いテラスのビバークで
友と語った山の夢
俺らトボケルの山男
ああ愉しき我がこころ
（秋の屏風東壁で）
ザックに残ったローソクを
ともしゃ雪洞白御殿
外はたそがれ猛吹雪
俺らトボケルの山男
ああ愉しき我がこころ
（冬の利尻岳北稜にて）

山屋讃歌なんだけど曲調が退廃的なので、だれか違う曲をつけてほしいなあ。

２００７年11月８日
マジックマウンテンの事務所にて

PROFILE
国井　治
■

1944 年　東京に生まれる
1959 年　城北学園高校（東京都）山岳部に入部し登山を知る
1962 年　登歩渓流会入会。以後、谷川岳、越後駒ケ岳、穂高岳、南アルプス、利尻の岩場と冬山に足跡を残す
1968 年　ドロミテブランドを扱う輸入商社デュコ貿易へ
1972 年　大倉スポーツに移籍。企画開発を担当
1973 年　エベレスト南壁登山隊に参加
1974 年　登山用ハーネス TROLL 社の「ウィランス・シットハーネス」を輸入販売開始
1975 年　クライミングシューズ「EB シューズ」を輸入販売
1976 年　ノースケープ社の肌着やパイルジャケットを輸入
1977 年　ヌプツェ北西峰初登頂
1978 年　KELTY パックを輸入
1979 年　シエラデザインズ社のパーカーなどを輸入
1980 年　ソレルの防寒シューズ輸入
1983 年　ナンガパルバット南面遠征
1984 年　独立し、登山用品開発会社マジックマウンテン設立
1985 年　グリベルの日本代理人になる
1986 年　オリジナルテント・アルパインライトを開発
1987 年　EUREKA テントをエバニューと共同で輸入販売
1989 年　マーモットのアルパインウエアを紹介する
1990 年　オルトボックスのアバランチレスキュー用品を輸入
1994 年　マジックマウンテン創業 10 周年にパキスタンのディラン峰南面で記念登山山野井泰史と用具顧問契約を結ぶ

以後、「オメガパシフィック」「ロックエンパイアー」「エーデルリッド」などの登攀用具ブランドの日本代理店を引き受けて販売。また、アジア生産でオリジナル製品を手がけ、バックパック、トレッキングポール、カラビナを開発し販売している。